歴史地理学における生態系と地域体系

山　田　安　彦

問題の基本的視角

最近，歴史地理学においては数多くの内外の秀逸な論説を渉猟して，その動向を追及し，整理して方向づけを明かにしている．その整理され体系づけられた各論稿は微妙なニュアンスの相異はあるが，共通していえることは，歴史地理学を大きく分ち，次のような角度から本質に接近していることである[1]．その要約だけを掲げる．

まず，歴史の地理的基礎としての地理的解釈であり，次は，過去の地理，つまり時の断面の復原であって，歴史的現在の地域性の追究である．第3には現在の地域は歴史的形成物であるから，過去の地理的事象の発展過程の理解なくては，現在を把握しえないとする態度である．これらの本質への接近方法が，従前から一系列上に発展してきたというのではなく，また歴史地理学の方法の展開としてこのように一系列上を進まねばならないというのでもない．それらの接近方法は相互に重層構造を構成し，時には相互に前提としなければ，本質に到達しえない場合がある．

その相前提的重層構造が基盤となって，さらに時の断面の認識を重ねて，現在までの継起的時間断面を発生史的に追究し，地域（景観）の変遷を追及して，地域（景観）変遷の速度とその要因を明かにする．これが地域変化の法則性の究明になり，歴史地理学における重要なる課題である．

ここで注意すべきは，地域（景観）変遷史はややもすれば，地域史に流れる恐れがないとはいえない．地域史的研究もまた重要であり，歴史学においても，歴史地理学においても集落研究などに大きく貢献している．地域史に傾倒することが地理学においてナンセンスであるというのではない．地域における史的発展の追及が，地域社会や集落構造の把握に多くの役割を果してきた．ただ，地域史を中央と対比しただけの地方史と混同したり，地方の特性を地域の特性とすりかえる恐れがなかったであろうか．中央の文化が地方に伝播するし，また社会構成において，歴史的に中央の支配下に属した場合もあったし，なお今日も文化的にも行政的にも中央の影響を受けているので，中央と地方を対比することだけで，地方の特質を見出そうとする点もある．しかし地方はその土地独自のエネルギーによって発生したものもあり，また中央からの伝播途中に文化変容したものもすくなくない．文化の Density の高い地域—中央—から辺遠部に向って伝播するのに時間を要する．その時間に，中央ではさらに高次の文化を形成する．その文化がまた周囲に拡大して行く．このような構造は一つのシェーマで画かれる．つまり始原文化が基底になって，一つの層（文化層）を形成しながら，辺疆部に伝播するが，これには時間を背景としているので，辺境部に現われたその文化層は，文化帯を造成する．その層は中央では過去の文化層であって，中央では次の新しい高次の文化層が形成され，空間的には新しい文化帯を形成する．これが G. Taylor のいう文化層 (strata) と文化帯 (zones) の block-diagram の説である[2]．彼のいう文化の分布，伝播，および進化の原理を基礎にして，中央と地方との関係を考えると，時間的背景があるので，同一平面上だけでの対比や直接的比較は慎まねばならないし，文化変容，地方独自の創造文化も考えねばならない．さらに重要なことはその地域の人間生態系を把握しておかないと，体系のなかの位置が明白にならないと思

う．構造，組織（体系）を理解した上で，比較の基礎的規範である目的と基準を確定すべきである．これによって共通性と相異性が把握しうるのであるが，これから特性を見出すとすると，科学で最も重んずる客観性から離れて，主観に流される雰囲気となるので，充分に比較の科学性ということについて検討する必要がある[3]．

少し，比較について筆が走りすぎたが，元へ戻し，地理学における発生史的研究は地域の構造に到達する．現在の地域は過去からの歴史的形成物であり，過去は現在のためにあった．したがって，すべての存在は，たとえそれが近い過去の存在であろうと，遠古の存在であっても，それは現在の存在のなかにおいてその意義と価値が問われなければならない．そこで地域（景観）変遷史，継起的時間断面の継続的研究は，地域現象の年代的系列を整理するだけではない．地域構成要素によっては，時代的変化と同一変化でない場合もあり，また時間断面における地域構成は年代的変化と平行して変貌しない構成要素もある．つまり，地域の変遷は一般に社会経済史的な変遷・発達過程とは異なり，社会政治機構，経済構造が発達しても，地域構成要素によっては変化しないものもあり，またその要素やその関連構造を基盤にした細胞地域によって変化の速度は異なる．このために，ただ単に地域の変化というだけではなく，変化のなかでも成長し，発展する要素とその要素によって変化され，その変化に適合して行く部門とを分けて考えることが必要ではないか．その両分野の立体面を取扱うのが歴史地理学と考えられる．このような空間の立体面構造を対象とするところに歴史地理学が歴史と大きく異なる点である．

したがって，歴史地理学は地域変遷を通じて地域の法則性を把握するのであるが，留意すべきは，時間によって地域空間のカテゴリが違うことを充分に認識すべきことである．すなわち封建社会における地域形成と近代資本主義社会における地域形成とは異なる．また現代においても，高速度道路が建設される以前と以後とでは地域体系が違ってくる．つまり社会機構，経済構造，技術発達による生産形態の変化により，地域のコンスティティユアント相互のメカニズムが異なり，また地域を形成するリーディングファクターが変化する．そこで，それらの構造と，個の人間が関与している地域と人間集団が関与している地域との相互関係，構成，組織，またその地域と地域，さらにそれよりも大規模な地域との関係，その相互関係，体系およびそれらの成立，発展過程を把握することが重要になる．

そこで，本稿は個の人間，また地域構成単位として重要な分野を占める家族世帯の生活空間，それと集落との関係を追究し，地域変遷の法則性，および人間生態系変遷の地域的特質を把握する糸口を見出す手続きを試みたいのである．

接 近 方 法

個の人間が関与する地域，および人間集団が関与する地域の体系を明らかにし，その変化過程を把握する手続きとして，人間の行動構造を構図化して考えてみよう．

人間が社会的に行動を起すのは，行動を行う個体（person）と他方に行動を規定する環境（environment）との交互作用のうちに実現する．この意味で $B=f(p\cdot E)$ の函数関係として表示しうる[4]．つまり人間の行動は本質的には環境に対する適応行動と考えられるからである．

個体が自然環境に適応し，部分的に統制する行動形態は技術的体系であり，個人相互の統制と適応は社会的であり，次には超自然的なものがある．これは人間が神に対する信念や神からの制裁を信ずるようになる適応の体系で宗教的体系という[5]．それらはいずれも顕在行動の一部になっている．行動を人間からみれば，人間を内側から適応行動反応を起させる最も重要な要因は欲求であり，これが人間的行動力の源泉になっているが，この間に思考が介入し，欲求⟶思考⟶行動ということになる．この他に欲求⟶習慣的回路⟶行動というものもある[6]．

人間行動の根源になっている欲求は単に生理的なものばかりではなく，心理的なものもある．それらの欲求や価値は強度と優位性の順に，階層的に，また発達的な重層構造で相互に関連する．例えば，安全性の欲求は，愛情の欲求よりも優位に位し，強くて重要な欲求である．ところが，それよりも強いのは，食物に対する欲求であり，一般的にいずれの欲求よりも最も強い．なお全ての基本的欲求は，これを包む一般的自己実現への途上の単なる階梯と考えられる．

要するに，人間にとって究極の目標は可能性の実現であり，完全な人間になるということである[7]．

このように人間の基本的欲求の構造と一方人間の心理構造の基本と合考すると，その間に人間生活の共通要素がある．それは人間というものが生産人であり，社会人であり，理性人であることといえる．この特性は人間社会集団に内在する構成像の如きものであり，その内容は社会や文明が形態を異にするのに対応して違ってくる．その内容の一般的構成について，まず考えられることは，宇宙，人間世界および事物について，その生成，相互関係の論理構造を究明する体系，すなわち科学への進路がいずれの社会にも存在する．その内容と形態は社会によって異なる．次に構成する部門は道徳である．これも人間集団には必ずといってよい程に存在するし，人間の相互関係を支配する信念の総体といえる．なお厳密な意味で，科学と道徳の中間に宗教があると考えられる．さらに別の部門として技術がある．これらの4体系が人間社会における心理構造の基礎的・普遍的構成であるが，これと並列して社会生活には基本的な観念が存在する．それが社会的範疇である．すなわち空間，時間の観念から，聖と俗，および価値などがこれであり，空間の社会的範疇は自己の居住地域を明確にし，個体と種族維持の表示であり，遠古から今日まで，また未開人も境界観念を有する．古代ローマの軍団は戦場の前線不動の地に野営し，これを変えることは不吉なことになると考えた．いずれの社会においても境界を犯すものは厳しい法的処置や制裁をうけた．時間の社会的範疇は播種，収穫，農業労働，宗教儀礼などにより社会生活のリズムが具体化され，これが生産と連関して，あるものは慣習を形成をするようになる[8]．

このような人間社会の心理と構成の論理構造の展開に地域を背景としたり，地域を基盤として人間関係からみた地域像というものを画いてみる．

さきに，私は人間生態学的な立場から地域内における人間関係を基盤にした地域像の構図を試みた．今回はこの前に画いたシェーマに多少補正を加えたい．まず人間生活の舞台となる土地が基盤となる．次に人間の最高，最大の目標である個体維持が人間生活の基底となり，もう一つの生物学的な側面である集団からみれば，種族の維持がある．今日における人間社会の場合，個体維持と種族維持は相前提になる場合が多い．この両者が生物学的基盤であるが，社会集団には自然的秩序としての自然集団＝共同体 (community) と精神的秩序・道徳的秩序としての文化集団＝社会 (society) に区別される[9]．

さて，人間生活の契機としての土地との関係をみると，人間生活の内容の構成要素のうち，土地と直接的に関聯を保ち有機的構造を有するものと，間接的なものとがある．直接的なものは経済的機能であり，間接的なものは精神文化的組織である．前者にはまず生産的関係があり，その生産を地域的に結合し，関連づけるのがコムニケーションで，両者によって重層構造をなす．後者の精神文化的組織には，前述した社会心理構造の基礎となる科学，宗教，道徳，技術の層と法律，政治，社会規範の層とが重層構造を作る[10]．

このような重層構造が人間関係からみた地域像であり，換言すれば地理的人間像ともいえる．各層は相互に前提となる[10]．したがって，ここに ecosystem を考えなければ，相前提の構造を分析しえないことになる。上記の順序で重層構造をなすのが地域像であるが，場合によって

はその逆の順序で重層構造を作る.

それらの重層構造体系において，土地の影響と人間社会・経済的な影響との相互関係は正方形の対角線を一つ画いたようなシェーマで相前提となって関連する[11].

以上は人間関係からみた地域像，土地に関与する人間関係の概念を図式化したものであるが，この構図だけでは地域（景観）を説明することにはならない.

地域というのは地域構成要素の主導要素を主軸として，その他の要素がその主導要素を中軸として有機的統一体を構成する範囲である[12].

少し蛇足になるが，地域と景観については，すでに多くの論説があるが，結論だけをいえば，景観は形態であり，形態を発生史的に追及すれば構造に到達する．環境は人間の存在形態との関係において，生態系を追及すれば機能の把握にある．したがって，類型としての景観は類型としての環境となり，また類型としての地域である.

地域としての景観は全体としてのシステムのなかにある．地域設定は単なる個性追究だけではない．ある基準尺度によって類型化し，比較することによって個性の追及にもなり，普遍性に近づくことにもなる．地域（景観）は視点によって，地域設定が異なるが，地域の設定には，地域構成要素の相互関連，地域と地域との関連，個と群との関係，すなわち，細胞的地域⟶小地域⟶中地域⟶大地域の全体における配列と体系を把握しなければ，地域の意義がうすれる[13]．この地域体系が成長という系列に従う場合もあり，またその地域体系自体が時系列である場合もある.

この地域体系をさらに明確に把握するためには，自然と人文との関係を体系的に分析しなければならない．地表の自然は地形と気候および土壌の性質を反映しており，そこに一つの生態的単位を形成している．これがティーネマンのいう Biotop であり，ブールンの唱える Site であり，ハドスンのいう Unit area，トロルの Landschaftselement，ミュッラー・ヴェッレの Landschaftsfaktor に相当する．このように構成単位である地域（景観）細胞が順次大規模な構成になる．つまり，Landschaftszelle→Kleinelandschaft→Einzellandschaft→Grosslandschaft→Landschaftsgruppe→Landschaftsregion→Landschaftszone→Landschaftszürtel という体系になる．このような景観組織に，無機界 (Anorganische Welt)，生物界 (Vitale Welt)，精神界 (Geistbestimmte Welt) の三要素からの構成による[14]．筆者の場合，この構成が自然的基礎（土地・気候・動植物），人間の生物学的基礎，経済的機能，精神文化的組織から相前提的四重層構造によることを論じている.

その体系の地理的事物 (Geographishehes Substanz) は，さらに個別的現象として各層に基礎的単位と基礎的構造が存在する．自然的基礎(自然地域)では基礎単位として，J. Schmithüsen のいう自然地域細胞 (Fliese) がある．これが生活体の環境となり，生活の場を構成する．つまり生活（空間）統一体[15]となり，フリーゼ組織 (Fliesegefüge) を形成する．さらに人間の働き(Anthropogene)と関係して，Fliese→Fliesegruppen (Fliesegefüge)→Vegetation＋Wiesengesellschaften＋Ackerunkrautgesellschaften→Siedlung (＋Fluren) などの体系を形成するが[16]，自然 (Physiotop) × 生物 (Biotop) × 人間 (Öcotop) の生態単位による一つの体系 ecosystem による分析，なおこれを時間的背景から分析することが歴史地理学の重要なる課題である.

人間態系と集落

生物および無生物を含む全ての実体，または自然の単位を生態系 ecosystem といい，生態学における最も大きい機能的単位である．これは生物共同体と無機的（無生物的）環境との相互作用で，後者が前者におよぼす作用 action と前者が後者におよぼす反作用 reaction とが

あって，両者は完全に相互依存で，生命の維持には両者が必要であって，別個に切り離して考えられない[17]．

そこで人間に関する生態系は如何．人は生態系の作用構造を変革する能力に関する限り，最も強力な生物となってきている[18]．諸々の営力によって無機的環境は変化するが，人間以外の生物の多くは身体を造りかえて適応するのであるが，人間の場合はこれが到底出来ない場合もあり，また間に合わない場合があるので，そこで，生活の場の変化，環境の違いを個体としての人間は如何に対応し，対処するか．それは人間の生活様式（文化）によって共同体化することにより対応し，対処する．さらにその文化を背景にしたパースナリティにより，対処対応する．このパースナリティにより新しい人間社会の進化にも対処しつつ未来を拓いていくのである[19]．したがって，度々繰返しのべるが，生態系の時間的変化，環境に対する人間社会の対応対処方法の変化から地域の変容を把握しなければならない．これが歴史地理学のまた重要な課題であり，先刻フリーゼとエコシステムについて論じたことと深い関係がある．

人間の社会進化が社会的有機体という高度な段階に進み，人間社会発展には高度な有機体の形成が必要であり，これによって人間社会は進歩してきた．これは単なる生態系ではなく，より高次のもので，生態系を変革し，人間生活に好適になるように改造するのは人間の思考力（脳，神経の進化）による．これは人の精神（心）が支配している世界，Vernadsky の心圏 noosphere に類似するもので，生態系の範囲を生物圏 Biosphere という[20]．

土地を基盤とした人間関係の構造体系は前述した相前提的四重構造であり，その体系は生活の組織である．生活とは生物の存在様式であり，生物には個体としての存在と同時に個体は集合（社会）のなかに存在する．これは人間生活にもいえることで，土地との関係（環境との関係）＝生態系に基づく，個→集合の体系が地域体系となる．

その構造の内部をみると，人間（生物）の存在には個体と集合の二側面がある．したがって，その生活には個体としての場合と集合としての場合があり，自然的基礎・人間社会経済と時間を背景として進化し，発展する．一般に生物には個体の進化・発展とともに，個体群＝社会としての進化・発展とがある．しかし人間の場合，自然環境の変化や時間を背景として個体が発達するよりも，人間社会の共同体化によって，進化・発展した種にかわる如くに社会共同体を形成する．

種 (species) は分類学上の単位であるばかりではなく，生態学的にみれば一定の生活様式を示す[21]．生物の個体は種の一員としてのみ存在し，生物の集合は一つの種に属する個体の集団として成立つ．種の存続は個体の存続を通じてのみ維持しうる．種は要素として個体を内に含む．個体のみ種の生活様式を実現しえない．如何なる個体も原則的には一定の種に属し，同種個体の関係を有しながら，生活し，そのなかで個体維持と種族の維持が実現される[22]（種内関係）．しかし個体維持と種族維持は相矛盾し，相反する場合がある．しかし人間の場合は理性による共同体化によって，種を高度に変えるような役割を果し，両者相互に前提となるように考えねばならない．したがって，前述したような相前提的四重層構造の地域的人間像を考えたのである．なお，群集関係において異なった種に属する個体間関係，すなわち種間関係は種内関係とは本質的に異った存在がある．

このような生態学的な種の理論を人間の社会経済に適用すれば如何．これはまず人間を生物学的基礎から視角をあてなければならない．これには前述したように，個体維持と種族の維持がある．そのために，食料の獲得，衣，住の保有のために，動物，植物を支配し，さらに再生産を考えた．この支配方法や再生産の方法によって人間の生活様式が様々に分化するのである[23]．このように生物の経済と人間の経済とが接続して，一つの単位を形成する．これが地理

学においては具体的な分析の基準尺度となり，単位となる．さらにこれが人間生態系の特質になる．

さらに，その単位論を展開すると，人間は一つの種であるが，種を生活様式とみれば，自然的基礎，社会経済，歴史的，民族的要素により，生活の様式は細分して類型化しうる．この細分化した生活様式をある種とみれば，個体の生活が最小構成単位とみることが出来る．これは人間社会において，しかも土地を基盤にしてみれば，いわゆる「地域」形成の細胞的単位は個人の生活空間ということになるのではないかと考えるのである．これが集合体となって，集落を形成し，さらに小地域→中地域→大地域という体系を造ることはすでに説述しておいた．

この考えに基づいて筆者は実際に地域を分析し，集落構成単位として家族生活空間の構造を明かにし，しかもその生活空間の構成分子の結合状態から地域体系を把握することに接近を試みた．特に水—耕地—家屋（家族）—神社という人間生態系から地域体系の変容（成長と変化）について追究した[24]．

なお，他にも実態調査によって人間生態系の整理を試みた論説と合せて整理してみる．

植物生態学の Tansley によれば，biome 生活系 (the whole complex of organisms —— animals＋plants ——socialogical unit) と habitat の interaction が生態系 (ecosystem) であるという[25]．これを人間の場合にあてはめると，culture→biome＝biotic formation (the whole complex of living organisms —— plants + animals + men)→habitat (the soil + climate) の相互関連体系[26] と考えられる．

さらに，人間に関する生態系を分析すると，次の 4 要素によって構成されている．

まず，第 1 は単位としての ecosystem である．これは分析しうる構成要素間の相互関係における単一構成機能である．環境—人間—動植物の体系の単位で，生態単位理論を形成する．次は構造としての ecosystem であり，構造要素のフレームワークである．これは有機的組織体としての地域といえる．第 3 は機能としての ecosystem である．これは各要素のコムニケーションの構造だけではなくて，この構造によって動く人間および物資のエネルギーの移動をも含む．4 番目は action と reaction としての ecosystem である．これは空間的にも社会的に全てにわたることで，立体的を意味する．集落・社会の階層関係，交通・流通関係，それに sybernetic system としての需要と供給関係，および社会組織の複合体構成や生活有機体の基礎構造しとて ecosystem である[27]．

以上は地理学的原理としての ecosystem の内容分析から類型的に整理してみた．それによると人間生態系には単位として，構造として，機能として，体系としての要素から成立っており，その構成要素としての役割をも所有している．

このような人間生態系の考え方を地理学に適用すると，地域研究においては自然体系（土地と気候）と生物および人間の統合から有機的統一体として地域を把握すること[28]や，soil と vegetation の統合により地域[29] を理解することが行われる．また人間占居と資源との関連的考察に生態的地理学の方法が大きく貢献している．例えば，人口増加問題と資源の高度利用による人口問題の解決である[30]．さらにまた自然地域の体系とそれを基礎にして文化景観に果した人間の働き (Anthropogene) による景観構造との関係の追及[31]，また，その変遷の要因を探った景観生態の研究[32] などがあり，われわれが学ばねばならない精緻な論理の展開がみられる．

自然的基礎と共同体組織の関係構造，機能から農業経営や集落の変貌を論及した集落生態分析の論説もある．それは G. Ward が Fiji 諸島の集落生態を分析したものである．まず社会体系について分析している．はじめに共同体組織追究である．それは集落領域の土地権利の継

承者であり，大労働生産の organizational unit である yavusa "federation" が主軸となり，数個の matanggali に分られる．そして，生産は matanggali によって組織化され，成年男子 10～20 人の構成による労働組織体で行なわれる．それは拡張家族 (extended family) i tokatoka の成年男子によって形成されたものであり，日常生産の役割は i tokatoka が果す．この張拡家族は核心家族 nuclear family を主軸として作れる．そして nucler family は単婚家族で経済的単位でもある[33]．このような組織が Fiji の村落共同体的様相であり，この共同体構成の各階層にそれぞれ社会的・経済的機能を有する．この機能をさらに traditional economic functions と present economic functions に分けて，共同体組織，各階層の機能分担との関係から，作物栽培，農業生産の変化，さらに土地の再評価などを考察して，集落人口の移動，集落立地の変化，集落形態の変貌などを類型化している[34]．これは集落の地域的構造組織を共同体組織と共同体各階層の機能分担および農業経営との関係，さらに両者と農業環境（人間生態系）の変容から追究している．この変貌の様相を明かにしようとする方法をわれわれは大いに学びたい．

このように社会組織(体系)の分析とこれと環境組織との関連を把握することは地理学においては重要であることはいうまでもない．社会構成単位である個の社会構造における位置，機能は personal attribute である．そこで個の心理作用と個の生活有機体との関係，社会環境の変動と個および個体群の行動との相関を究明し，環境と人間生態の接触点を明白すべきである[35]．

要するに，地理学的分析においても社会体系，特にその構成要素の機能，さらに個の生活有機体と個の心理の関係にまで追及しなければ，人間生態系の分析把握にはならない．

こうなると個と集団の関係，特に人間の場合について考える必要が生ずる．

まず人間は生れながらにして，家族，共同社会，国家，人間社会全体における構成員であり[36]，そのなかで生活しなければならない．したがって単一から複合へ simple—complex の対照的関連構造においては the individual—the family—the pack—the head—the community--the society—the race--the nation—the species の如き系列関係になる[37]，これが成長，発達する社会進化の過程は，内部的なものから外部的なものへ向って作用してきた面と，大集団の構成分子に対してより高次な段階へと作用してきた面があると考えられる．それが cell から individual へ，individual から family へ，family から small group へ，small group から large group へ，そして終局的には state へというプロセスを辿ってきた[38]のではなかろうかと思う．

このように個の研究の重要性と必要性を論究して把握したが，これと同時に community の変容構造の分析も重要である．環境が変動しても人間個体は容易にそれへ適応しないので，community がそれを補い，あたかも種を変えるが如くに，community が進化して，環境を最大限に利用し，また改変改造する．このように共同体化の進化，発展によって，社会は進化し，新しい人間を作り，未来を開いて行く．この根底となり，根源となるのは人間の頭脳であり，またこれによって新しい社会が生れる．したがって人間の頭脳と精神が地域形成，地域体系に大きな役割を果している．具体的には地割景観と古代集落体系を事例に取挙げ，別稿[39]に論を展開した．本稿はそれらの拙稿の論理の展開と同一系列上にあるものである．合せて参照していただくことを願う．

なお，community については，community が占居する機能地域との関聯，つまり人間社会の有機的統一体→動物→植物→土壌のコンビネーションの究明，特にエネルギーのバランス，生態系生態学[40]のサイクル＝生物地化学環 (biogeochemical cycles)，制限要因 (limiting factors) と人口動態などの体系を究明する[41]．これが群集生態学[42] (community ecology) と生物地理学 (biogeography) の関係を追及することになる．つまり場所 (habitat) におけ

る植物と動物の体系 (Biocenosis) と植物と動物の存在する場所 (habitat) の体系 (Biotope) の ecosystem[43] と Human community の関係体系を把握しないと地理的現象の空間（地域）体系と意義および特性を理解することが出来ないのである．さらに説明を加えるならば，Human community を ecologically と socially に分けて，前者は人間に依存する動植物を含めて，人間を主体とした異種の集合有機的統一体として考え，後者は人間という一つの種の集合有機的統一体で，機能と構成においても，社会的，経済的にも一つの単元を有するものとして観ることである[44]．

世帯生活空間と集落

人間生態系と集落について，貧弱ではあるが，一応基礎的論理構造を整理した．この整理構想は実態調査によって培われたもので，その基盤について論述しておく．集落構造と地域体系を分析するのに，人間社会構造，特に個，家族，共同体の関係からとその生活基盤から接近した．具体的には家族世帯の生活基盤である居住地—水—土壌—距離—農耕地—山林，水管理—神社，分家，社会規範などの集落生態系を分析調査したのである．まず，居住地の立地選定要因が水の確保，水と耕地関係からの本家と分家の距離，河川の流れ，生活慣習，生活繁栄意識および歴史的政策上の要因などがあげられる．居住地と耕地の関係は本家と分家の共存関係，農業経営上から水の確保，栽培作物の種類，歴史的に開拓条件，水利関係上の条件，耕地の地形的位置，土壌条件などにより，居住家屋を核として栽培作物別，農用地別の重層圏構造を構成する．これが基盤となって集落形態を作りあげる．水管理のための神社を中心とした村落共同体的様相，村落秩序のための所有境界線の確立，飲料水確保のための社会規範，共同体それ自体の宗教的背景と宗教的役割が集落体系を整えていることなどを分析し把握した．これが前掲した拙稿「南部藩越前堰開拓村落の微視的歴史地理に関する若干の問題」の論究要旨である．

さらに精神，宗教的体系と生産機能を背景とした地域体系の整理についての構想基盤についてのべる．それにはわが国の基底をなす水田農耕社会を発展させるには集団的生産行動が基礎になる場合が多い．水利条件の整備，土地造成などがそれである．水利の秩序，耕地秩序，所有権の確立には共同体規範が必要，それを強固なものに，また集団生産のための共同体紐帯の強力化のために宗教が背景となる．この宗教倫理構造が集落（地域）体系を形成して行く．これを論及したのが，これも前掲した拙論「古代の社会倫理と地域体系の成立」である．

なお，生活慣習，社会規範，技術，合せて一般に人間の知性が人間社会をリードしている．すでに若干論述しておいたが，景観（地域）の変遷は社会経済史の変貌と同じ様相ではなく，景観には成長，発達するものと退化して行くものがあり，その変遷速度と要因を追求するために，遠古から持続している古代地割を取挙げ，持続する要因を把握することを試みた．特に具体的には社会規範というものが景観構成に如何に役割を果しているか．この課題から景観構成の体系を把握しようとしたのが，これも前掲の拙文「景観構成要素としての社会規範」である．

いずれも人間生態系から地域（景観）体系を把握しようとした試論で，背景に時間をおき，地域的空間の変遷の法則性を追及しようとするのが大きなねらいとしている．

その場合，人間生態系においては，いつも全体における個の位置，機能を明かにして個が関与する細胞地域と群が関与する小→中→大地域の成立体系，発展過程にライムライトをあてようとしているのである．

なお，家族から社会への社会体系を通じて集落の発展過程を明瞭に図化し，明晰な論理を展開したものに，Hoffman 論文をあげねばなるまい．これは Bulgaria 農村において，single farm から irregular clustered village に進化する過程を歴史的事象，社会機構などから分析し，集落の機能と体系を論及したもの[45]．これとはアングルは異なるが，有核集落 (nucleated

settlement) が分解分散する要因を歴史的，政治的，社会的から追究，特に社会的有機体の役割，家屋と耕地の配置，立地条件の基礎から究明[46]．さらに注意すべきは，集落分散の要因を血族関係 (kinship) や相続 (inheritance) の面から考え，血縁体系と集落体系 (family—hamlet—village—village group) の関係を論じ，近代社会への移行過程から集落の分散を分析する点[47]，集落地理学の分析においてはユニークである．この論文はなおも将来に向って再統合 (reintegration) の企画をも考えている．

今まで，筆者は主として社会構成単位と集落構成単位を分析の視点と考え，集落の分散，集中，地域体系を把握するのを試みてきた．しかし，これとは全く反対の視角から接近したのが，K. H. Stone の労作である．これは異色あるもので，スウェーデンにおける pioneer fringe の fringe-of-settlement の分散を文化的密度の高い重心的地域の continuous settlement から高緯度に向うに従って discontinuous settlement の形態に移行するのを国家的経済，地域的経済の基盤（自然的基礎），鉄道，道路および河川分布などから追及[48]．これは分散の立地と類型に分ち，経済形態と人口分布構造と Region→Zone=(Type) の体系を把握しようとした論説で，わが国の散村にも一つの示唆を与えてくれるものである．つまり，わが国の集落を巨視的にみた場合，日本文化として層の深い畿内から遠隔地にあたる部分，東北（北上川流域）北陸（礪波），四国（讃岐），山陰（簸川）に顕著で，典型的な散村形態がなお残存している．これを如何に解釈すべきなのか．記して後考をまつ．

論の展開を再び元に戻し，構成単位と体系についてみる．農業社会構成の基礎単位である農業世帯（家族）とその生活空間との関係が地域形成に重要な要因となる．特に居住地と農耕地，山林の立地関係や距離が集落（地域）の体系に主要な成因となっている．筆者も別稿[24]でこれに追究した．Chisholm はこのような農業世帯生活空間から集落の集中・分散を分析し[49]，さらに加えて，生態系から集落の立地要因，位置撰定要因（水，耕作地，草地，燃料，建築材料などの集落共同体経済5大要素から）を論じ[50]，局地的道路の形態が集落形態に関係が深いことを論及している[51]．

なお，歴史を背景にして，社会組織における Bauer, Gärtner, Häusler の関係，土地所有関係などの社会構造の変遷を通じて，農業集落形態の発達過程，変遷を論及したものもある[52]．

要するに，自然的基礎—共同体（構造・組織）—集落も一つの生態系であって，前述した如く，その中で作用 action と反作用 reaction の相互関係から，また機能から考察してきた．人間はより高度に環境に適応するために，高度の土地利用と高度の生活空間を形成するため，Fliese—Anthropogene, および Physiotop—Biotop—Öcotop の関係を合理化してきている．その具体的な手段としては土地制度を整備し，土地区画を整理するなどしてきた．それが土地表面に刻印した (prägen) のが，土地景観である．例えば，ローマのケントウリアであったり，中国の井田法であたっり，日本の条里地割であったり，新しくは北海道の屯田兵村耕作地割，アメリカのタウンシップなどが顕著なものとして挙げられる．このようにして形成された土地割りは，今度はそれが環境となり，農業生産や農業生活に影響することになる．例えば，アメリカのタウンシップは方格状地割というものが，生活空間の重要な基礎環境となり，これに適合した生活と生産が形成される．これが融合して新しい生活様式が造り出される[53]．時間を背景にして地域から人間を考察すると，生活様式は地域を通して形成されることを軽くみてはならない．つまり，人間社会は時間を背景とすることによって地域化されるといいうるのではなかろうか．

そこで，自然的基礎と人間社会・文化の関係を整理すると3つの Situationen がある．まず，自然が文化景観の機構を制約する立場，次は，自然と文化とが相互に滲透する場合，3番

目は文化が自然的基盤に刻印し，変形，改造する立場である．これが時と場合によってその立場と役割の比重が異なり種々の結果を紹き，景観類型を形成する[54]．そして現存（文化）景観は次に掲げるところの根本的に異なる形態から成り立っている．まず，その1は，現在において形成されつつある形態，次は，過去において造成された形態ではあるが，今日もなお機能を有するもの．その3は，やはり過去において造られた形態で，現存しているが，機能を有せざるもので，その次が，過去に形成されたが，今日ではその痕跡形態のみが存在するものである[55]．これが文化景観（地域）の分析に重要な原理となる．したがって，前述したような歴史地理学からの援助が必要である．

景観が地理学研究において重要であることは自明のことであるが，地理学において構造を追及するには景観（形態）を発生史的に追求すべきであることは既に論じた．景観，特に文化景観は広義に解釈すれば，集落が中心になって展開されているといっても過言ではあるまい．人間の存在形態（生活様式），社会機構と組織は形態として集落（都市・村落）に現われる．したがって，社会構造は集落の構造となって現われ，また社会組織(体系)は集落組織から地域組織（体系）となって具象化する．なお，前述してきたように，社会機構・組織の変化は集落の変容に影響するが，集落（地域）の変容はその構成要素とそれによって形成された細胞地域によって変遷の速度は異なり，社会経済史の変遷過程と必ずしも同様でない場合がある．この点に歴史地理学が歴史学とは大きく異なる点といえる．集落の変化，地域の変遷の法則性，また変遷の地域性の追及には歴史地理学の分析が必要であり，歴史学の援助がなければならない．このように考えれば，集落地理学分析と歴史地理学的分析とを切り離して考えられないのである[56]．むしろ両者を兼ねることが大切であるから，ここに集落地理学分析と歴史地理学のそれとを体系整理することによってより高次の段階に進みうるものであろう．

そこで集落地理学の研究の方向と課題について考える．それには3つの方向性がある．その1は集落の比較形態学的研究であり，発生論的構造体系の追求が重要なる課題となる．次の観点は，第1のそれと関連するものであるが，構造論的分析であり，集落構成の個の形態の発展過程とその各段階における組織体系の究明が課題である．第3の視角は，個々の集落の発達を規定した歴史的・社会的要因の追求である[57]．

それらの基本的なる視角はいずれも前述の人間生態系を基盤にして追求しなければ把握しえないもので，人間の存在体系，人間の生物学的基盤と精神的体系，地域構造組織などのエコシステムの究明にある．なお集落の歴史地理学的分析には常に細胞的要素と細胞地域の論及が基盤になることを忘れてはならない．

歴史地理学の方向と課題

歴史の様々の事象は一定の時間のなかに，また地理のそれらは一定の空間のなかに共存する．しかもそれらの諸事象は空間のなかに共有し，相互に関係を有する[58]．現在は歴史的形成物であり，その根底には空間ある．そこで現在を理解しようとすれば地域空間を通じて史的発展のプロセスを究明すべきである．つまり，時間を背景にすると，人間生態系の時間的変容と，個と集団がそれぞれ関与する地域の関連とその発展過程を究め，その基底にある論理構造を追求することである．

空間と時間の関係の基本形を図式化すると次のようになる．Rows をX軸にし，Columns をY軸にすれば (X)×(Y) は地域空間となる．前者は空間的変化（分布）であり，後者は立地関係や社会経済的要因（地域的機能）である．さらに Slices をZ軸にすると，これが時間であり，一応はこのように画けるのではなかろうか．このいずれの軸にも基底構造となる細胞的組織があり，全体へと体系化される．なお，Z軸の short-run processes が functional

erganization であり，long-run changes が historical geography であるといえる[59]．筆者はこの時間的変容を成長と変化に分けて考えたい．これについては既に若干説述しておいた．すなわち，ある時の空間構造の中枢的・基礎的構造は時間を背景として成長し，これに適応するように個の要素的な構造は変化する．その基礎的構造が変化・交換される場合があれば，次に新しい成長の構造が現われ，それに基づく要素的構造が変化していくというように，いずれの場合でも成長する分野と変化する分野がある．これを地域の場合について考えれば，地域構造のうちで成長するのは生産の基礎構造であって，変化するのはそれに関係し，生産地化される景観である．これも科学・技術・思想・社会体制によって，成長する部門が変る場合があるが，変ってもそのものがまた成長するので，いずれであれ，生長と変化の両部門がある．現代でいえば，成長しているものといえば電気，水道，交通による基礎構造で，これに従って関係構造の諸要素は変化している．

要するに，時間を背景とすると継起的な変化をみなければならない．つまり，sequence of change の構造を考えることである．これには次のことに留意し分析を進めるべきであろう．まず，はじめに行動型態 (behavior patterns) としての人間の活動，次が理想欲求に到達するために行動を起し，その活動の結果としては地域の発展 (development) であり，第3には活動の根源としての地域の価値体系 (value system)，そして4番目には，行動の型を変化させ，高次の目標に向って成長を促進し，修正する統制の過程 (control process) が挙げられる[60]．これらのフレームワークから変容の過程を分析することが基礎的論理構造に接近する一つの方法であると考えられる．なお，これに合せて，社会体系（個→集団）= individual → group→community の behavior の特質をも考慮することが重要である．

その分析によって把握した構造を基盤にして，成長する面（社会経済・政治・中枢管理機能）と変化の形態として現われる環境面との交叉する立体を考える．たとえば，科学技術，社会経済機構などの発展・成長により，中枢管理機能，生産機能，流通交通機能が発達し，この成長によって集落（都市・村落）・産業および道路の環境が異なり，これに伴って家屋配置，集落形態，道路網分布にまで変化する．このように成長と変化の関係を把握するには，人間社会の体系と地域の組織の関連を究めることになる[61]．この成長させる根源はパースナリティである．しかし，その基盤になる意志は環境影響と触触する．そこで人間の場合，共同化によって高次の段階の存在（生活）に発展させなければならない．恰も高次の種の如きものを創造していくのである．要するに，種内の各個の意志の総和は種の意志となる[62]．

これまで時間を背景とした人間生態系と地域構造・地域体系の関係を追及する手続きを論じたが，なお大切なことは personality (intellect, critical human attitudes and responses) が人間生態系のなかで，また地域分析研究において如何なる位置を占めるかについて考えることである．このためにこそ，筆者は論構成の不備を承知で敢へて地域的人間関係構想像を試みた．それは本稿の接近方法のところで論述したし，詳しくは別稿に論を展開しておいた．そこでは地域分析には科学・技術・思想・道徳など人間の精神生活からの視点も忘れてはならないことを指摘し，論証したのである[39]．つまり，地域は人間の精神生活が大きな構成要因となっていることを認識しうる．このように地域の動的研究には，どうしてもダイナミックな human forces (personality) からの分析が必要であり，地域分析研究にそれが如何に位置づくか，またその意義を追及するのが，今日の地理学の新しい方向でもある[63]．これを Psychologcial geography という．地理学はこの他に Scientific Geography と Applied Geography の方向がある．カントの論説には，感覚経験的認識の総体を現実世界といい，これには内的感覚の対象である精神界 (Seele) と外的感覚の対象である自然界 (Natur) によって到達しうると説

く．彼はなお論を続けて，前者は人類学（人間科学）となり，後者は地球誌となる[58]．ともかくもその現実世界は土地空間が基盤となっているので，地域の把握には Seele からの接近を忘れてはならない．科学や思想の発達と地域形成とは大きな関係がある．今試みに大科学者や大思想家の現われた地域（国家）は高い文化地域を形成していた．大科学者，大思想家の数と生産や文化の発達水準と一致し，歴史的にその変動もまた一致することは無視しえない[64]．ここに，Intellect と Region の関係追及がまた地理学の重要なる課題となる．

なお，地域（景観）と精神界の関係について，Schwind は客観精神 (objektivierter Geist) から（文化）景観を把握すべきことを主張している[65]．文化景観はまず第1に如何に存在するかということについて考えるべきである．そして文化景観を考察するのには大地とか人種と呼ばれるものを分母にして決して考えてはならない．そこで，文化景観は，個人の創意 (Initiative)，人間集団の創意，大衆行為 (Massenhandlung) <その際，大衆（集団）が個人，あるいは集団の行為の正当性を恰も確認するように，そしてそれをもって大衆に貫徹力を与えたところの大衆行為>，国家権力的決定 (staatilchen Machtspruch)，意識的模倣 (bewußte Nachahmung)，伝統(Tradition)，偶然性 (Zufall)，民族的素質 (rassische Veranlagung)，景観的魅力，(Landschaftsreiz)，自然的必然性 (Naturnotwendigkeit) によって規定されないか否かということをその各々の場合について研究調査すべきであるという[66]．このように法・道徳・人倫など，つまり客観精神からの分析・調査が重要である．景観分析に客観精神の視角からの分析も充分留意すべきことを Schwind は力説する．この客観精神は景観構成要素として重要な役割を果すが，なお景観の構成には次の要素も主要なる役目を有す．まず自然景観の構成には，はじめ非生物個別現象，非生物複合現象，生物社会現象，生物的複合現象，生物要素の土地現象よりなる．ところが人文景観はそれらの構成によって形成された自然景観を媒質 Medium として文化力 Kulturkraft と時間を背景に既述した3つのシテュェイションによって構成される。なお，後者の人文（文化）景観は筆者の説述した地域的人間関係構成図式のように重層構造をもって構成されるものと考える。つまり，それは人間社会の共同体的関係，生産構造，流通構造，客観精神構造，および科学，技術，宗教構造などの相前提的重層構造によって形成されているのである。

なお景観組織（体系）については地理的 Formenwandel（空間的継続形態変化の秩序的形成）[67] によって整理しうる。すなわち，Benachbarte Lagen (1, planetarische, 2, west-östlische, 3, peripherzentrale, 4, hypsonmetrische), Nichtbenachbarte Lagen (1, Homologe L., 2, Opponierte L., 3, planelarische Opposition, 4, Analoge L.)[68] の Lagetypen によって形成され，これらの組合せの相互の強弱によって景観特性が現われるのである．

以上，人間生態系と景観について種々論じてきたが，それらをここで景観の概念内容を要約すると，1．特性を有する個々の空間（a．小地域，b．相観を重視した景観像）であり，2は地域空間実現の形態（a．その地域に優越した特色，b．形態の結合統一）である[69]．

結　　語

われわれは時間と空間の2つの situation を持つ．物理学的には両者のカラゴリは異なるが，人間生活からみれば両者ともに属性 (attribute) である．時間の変遷が歴史であり，空間の変化が地理である．したがって，人間にはこの2つの変容が根底に存在する．両者が相互に関連して，つまり時間を背景として空間の特性が現われ，whole としての Region が形成される．そこでそれを把握しようとすれば，地域は過去の数多くからなる時の断面 (cross-sections in time) によって形成されたものであるから継起的断面体系研究が必要となる．地域学において

時間の機能を理解するには，時間それ自体や時間から分離した変化の研究ではなくて，時間と空間の相互関係によって生じた地域的変化を研究すべきである．人間舞台の土地の変化を形成している時間・空間の相関現象の全体的統合に接近するためには，simple—complex→partial—total の統合の体系の把握が大切で，これを研究しなければならない[70]．このように考えれば，歴史地理学は経済地理学や政治地理学と比較することの出来る地理学の一分科ではなくて，歴史地理学のもとに分科をもっているそれ自体で完全な，もう一つの別の地理学 (another geography) であると Hartshorne はいうが[71]，しかし，まだまだ歴史地理学は体系を整えるべきである[72] と考える．

さて，歴史地理学で時間といえば暦上の期日を一般に考えがちであるが，空間の変遷を対象とする場合，地域社会環境構成因子の主要因子，すなわち物理化学的因子，生物学的因子（動植物，微生物），社会的因子はそれぞれ時間と切り離して変化を考えられないが，その時間の単位が異なる．殊に生物学的因子は生物によって存在期間が同一でないし，さらに生長・繁殖などの各現象が占める割合は，生物によって異なる．つまり生物学的時間[73] ということを考慮しなければならない．したがって，(人間) 空間の変遷を対象とする場合，それを構成する自然的基盤の生物学的因子（動植物）の成長と変化の時間というものが，人間社会生活に大きな影響因子となることを充分に考慮する必要がある．

そこで，人間以外の生物の空間と時間についての取扱い方法についてみる．まず可視的な形態，つまり景観から類型化し，Flora を取挙げ，Flora と Floras の範囲における地質学，古地理学 (paleogeography) と気候学的にその変化を究明する．次に現在の Flora の分析にはそれを構成する種 (species) の地域の分析を進め，さらに直接的にはその古植物学的 (paleobotanical) の資料，間接的には系統発生論的 (phylogenetic)，植物地理学的 (botanico-geographical)，ecologico-phytocoenological および biotic の研究に基づくことである．そして植物の分布と動物のそれ，または Flora と Fauna，および hosts（宿主）と parasites（寄生物）の分布とを比較する．なお，Flora の歴史地理学的分析には，古植物学的資料に基づくべきであり，たとえそれが継続的でなかったとしても Flora の歴史を分析する唯一の直接的な証拠になる．そして系統発生学的方法によって，Flora を構成する species とその基盤を把握し，さらに深い調査により species の組織研究を行い，属 (genus→genera) への発展の系統方向を追究することである．

この系統発生学的追究に基づいて，origin の center と center からの dispersal の変化・歴史を追及すれば，Flora の発展方向を把握しうる．そして系統発生学的環と属を構成する種の関係は主として形態学的方法によって接近しうるし，種の構造（形態学的，細胞学的，解剖学的，生化学的）の sequence of change（継続的変化）は個々の種（属の全体的セクション）の地理学的立地の変化とは一致する (coincide with)．

要するに，原形から複合構造への発展・進化には，地理学的な分布を基礎的に参照し，Flora を構成する種とその範囲を分析し，系統発生史的に追及して構造を把握する．加えて最近は人間活動によって Flora が大きく変化されているので，area における habitat の種の生態学的研究も重要である[74]．

人間社会の空間的・時間的変遷とその様相（法則性）を把握しようとすれば，本稿で前述してきたように，個を環境体系の主体として地域社会（生活空間）との関連において把握し，家族世帯（家庭）を経て，人間社会集団の空間構造における時間，時間構造における空間の把握に接近する．そのためには，地域社会の環境要因（物理化学因子，生物学的因子，社会的因子）を分析しなければならないことは既に述べた．それらの因子間構造把握の接近方法について論

述したので，次はそれを基盤にして，人間地域社会の生態系分析について論を要約しよう．

これにはまず本稿で論述したように人間の生態系を明白にすることが肝要．自然的基礎——生産・流通——社会の環の関係の把握である．より詳細に図式化すると，人間の eco-system は culture (human beings→standard of living economy)→biome (the whole complex of living organisms=plants+animals+men)→habitat (physiotop+biome, the climate, the soil, the relif, hydrography) などの interrelation である[75] と考えられる．

そのような人間の ecosystem の原理に基づいて，Clark はヨーロッパの先史文化を理解しようとしている．まずヨーロッパの自然的基礎を植物相から地帯区分している．それは大きく無樹地帯 (treeless zone)，北部松柏科樹林地帯 (Northern coniferous forest)，温帯落葉樹林地帯 (Temperate deciduous forest)，および地中海常緑樹林地帯 (Mediterranean evergreen forest) に分けているが，さらにこれと密接的に関係する気候帯との関連を加えて，地中海ヨーロッパ (Mediterranean Europe) の east, west, 温帯ヨーロッパ (Temperate Europe) の west, central, north, および極地圏ヨーロッパ (Circumpolar Europe) に分けて，それらを時間的背景から文化の発展を論じている．つまり，ヨーロッパの生態的地帯 (ecological zone) における文化形態の発展を分析し，時間的変容と空間的移動の関係を追究しているのである．時間と空間の関係において，時間が進むにつれて，都市的文明 (urban civilization) の Impact が Farming Communities から Hunter-Fisher Bands へと滲透して空間的に拡大して行くプロセスの解明を生態系から視線を向けている．Clark の Time-Space relationships は Taylor の文化層と文化帯との説に類似するところがあるが，Clark は climat, vegetation, Fauna が時間を背景として変化する形態を基礎として，そこに形成される habitat, biome (flora→fauna→human life) と Economic Stages との体系から時間的変容と空間的移動の関係を追及している[76]．しかし具体的には空間体系を整えるためには habitat (soil, climate) の physiotop, (flora+fauna) の biotop, human economy の Ócotop の単位から視角を定めることを忘れてはならない．

歴史地理学で重要なことは時間を背景として空間体系の基盤を考えることである．個体の環境として場があり，場と個体との関係が生活空間として地域の細胞的役割を果す (所)．個体—場—細胞的地域—地域—大地域という地域体系を形成している体系を把握することが重要である．

本稿を草するにあたり，本学教授理学博士川本忠平先生から常に指導をうけ，多くの教示をいただいたし，また大阪市立大学の岩田慶治先生から機会があるごとに示唆をえた．

なお，本研究は昭和 39 年総合研究科学研究費（代表　千葉大学教授理学博士　菊地利夫先生）の一部によった．この際，筆者はそのうちの京都研究班（代表　立命館大学教授理学博士谷岡武雄先生）に属し，谷岡先生からも指導を受けた．今ここに誌上をかりて先生方に謝意を表す．

註および参考文献

1) 歴史地理学の発達については，次の労作から多くの教示をうけた。
野間三郎：歴史地理学の発達，森鹿三・織田武雄共編，歴史地理学講座，第1巻，朝倉書店，昭和34年1月　所収
谷岡武雄：景観の復原と発達史に関する方法論的考察，谷岡武雄：平野の地理，古今書院，昭和38年1月所収
日本歴史地理学研究会：歴史地理学紀要 I，本質と方法，日本歴史地理学研究会，昭和34年4月
藤岡謙二郎：歴史地理学研究史，藤岡謙二郎編：人文地理学研究法，朝倉書店，昭和32年12月
浅香幸雄：日本の歴史地理序説—学史と研究史，浅香幸雄編：日本の歴史地理，大明堂，昭和41年1月

2) Taylor, G.: Urban Geography ; A Study of Site, Evolution, Pattern and Classification in Villages, Towns and Cities, London, 1951. pp. 79-81, 91-92.
3) 比較については，エチアンブル著　芳賀徹訳：比較文学の危機—比較は理ならず—，学鐙61の4，昭和39年4月～61の12，昭和39年12月から種々教示をえたので記しておく。
4) 福武直編集代表：講座社会学，第1巻，個人と社会，第1章　行動の理論
猪股佐登留訳：クルト・レヴィン；社会科学における場の理論，誠信書房，昭和37年2月（4版）pp. 37～40.
5) 馬場明男・早川浩一：G.C. ホーマンズ；ヒューマン・グループ，誠信書房，昭和34年7月，pp.142～143.
6) 福武直編集代表，講座社会学，第3巻，社会と文化，4-2 制度的文化と社会意識，東大出版会，1961年6月（2版）pp.81～82.
7) 上田吉一訳：マスロー；完全なる人間，誠信書房，昭和39年6月，pp. 205～207.
Maslow, A.H. : Motivation and Personality, N.Y. 1954, pp. 80～106.
Malsow, A.H. : Toward a Psychology of Being, 1962.
8) ガストン・ブートゥール著・寿里茂訳：文化と心理，白水社，1959年8月，pp. 42～60. 心理構造の不変の枠組みから多くの示唆をうけたので記しておく。
9) 沼田　眞：生態学方法論，古今書院，昭和34年10月，pp. 43,44.
10) 山田安彦：景観構成要素としての社会規範，岩手大学学芸学部研究年報，20巻，1962.
11) Maas, W. Problme der Sozialgeographie, Berlin. 1961, S. 24～27.
12) 地域については次の文献を参照した。
野村正七訳：ハーツホン著；地理学方法論—地理学の性格—，朝倉書店，昭和35年6月，pp 283～422.
木内信蔵・西川治：地域論，辻村太郎編，地理学本質論，朝倉書店，新地理学講座2巻，昭和30年12月，pp. 245～287.
Whittlesey, D. : The Regional Concept and the Regional Method, in James, P.E. and C. F. Jone (ed.) : American Geography—Inventory and Prospect, A.A.G., 1954. pp. 21～65.
13) 野間三郎：景観と環境，現代地理学講座　1，自然と社会，河出書房，昭和32年1月　所収
14) 辻村太郎：景観論，辻村太郎編：地理学本質論，前掲書
15) Schwind, Martin : Kulturlandschaft als objektivierter Geist, Kulturlandschaft als Geformter Geist, Darmstadt, 1954. S. 20-21
16) Clauser, Ewald. : Anthropogene und naturräumliche Ordnung in der Kulturlandschaft am Beispiel der Landschaftsstruktur des Kreises Leonberg, Forschungen Zur dentschen Landeskunde, Bd. 149. S. 34, 68.
なお，景観体系については，次の文献も参照したので掲げておく。
Winter, Heinrich. : Die Entwicklung der Landwirtschaft und Kulturlandschaft des Monschauer Landes unter besonderer Berücksichtigung der Rodungen, Forschungen zur deutschen Landeskunde, Bd. 147. S. 21f. S.61f. S.89f.
17) 京都大学生態学研究グループ訳，E.P. オダム著：生態学の基礎，朝倉書店，昭和33年4月，pp.9～13.
芦田譲治他7人編：生物と環境，現代生物学講座 5，共立出版株式会社，昭和32年2月，pp.150～154.
八木誠政・野村健一共編：生態学概説　養賢堂，昭和31年10月，pp. 52～60.
18) 京都大学生態学グループ訳：E.P. オダム，生態学の基礎，前掲書，p. 12，pp. 369～373.
19) 今西錦司：生物社会と人間社会，芦田譲治他7人編，人についての生物学　II，現代生物学講座 10，昭和33年9月　所収，pp. 181～186.
20) 京都大学生態学グループ訳：E.P. オダム生態学の基礎，前掲書，p.12，pp. 370.371.
21) 徳田御稔：生物学の方法，唯物論研究 12，1962年12月，p. 119.
22) 徳田御稔：前掲論文，p. 120.
23) 渋谷寿夫：生態学と唯物論的弁証法，唯物論研究 12.，1962年12月，p. 126.
24) 山田安彦：南部藩越前堰開拓村落の微視的歴史地理学に関する若干の問題，日本歴史地理学研究会：開発の歴史地理，歴史地理学紀要　7，1965年　所収.
25) Stodart, D.R. : Geography and the Ecological Approach ; the Ecosystem as a Geographic Principle and Method, Geography, vol. 50, Part 3, No. 228, 1965. p. 243.
26) Clark, J.G.D. : Prehistoric Europe ; the Economic Basis, Methuen, 1952. p.7.
27) 生態学の内容の類型化については Stoddart 論文より構成を試みた。
Stoddart : ibid. pp. 243～247.
28) Eyre, S.R. : Determinism and the Ecological Approach to Geography, Geography, vol. 49 Part 4, No. 225, 1964, pp. 369～376.

29) Edwards, K.C. : The Importance of Biogeography, Geography, vol. 49 part 2, No. 223, 1964. pp. 85～97.
30) Newbould, P.J. : Production Ecology and the International Biological Programme, Geography, vol. 49 part 2, No, 223, 1964. pp. 98～104.
31) Clauser, E. : Anthropogene und naturräumliche Ordnung in der Kulturlandschaft am Beispiel der Landschaftsstruktur des Kreises Leonberg, a.a.o.
32) Winter, H. : Die Entwicklung der Landwirtrchaft und Kulturlandschaft der Monschauer Landes unter besonderer Berücksichtigung der Rodungen, a.a.o.
33) Winick, Charles : Dictionary of Anthropology, Littlefield, Adams and Co. 1958. p. 203 単婚家族の意味で核心家族ある。
34) Ward, R. Gerard. : Cash Cropping and the Fijian Village, Geographical Journal, vol. 130 part 4, 1964. pp. 484～500.
35) Schnore, L.F. : Geography and Human Ecology, Economic Geography, vol. 37 No. 3, 1961. pp. 207～217.
36) Stepledon, George. : Human Ecology, Faber and Faber, London, 1964. p. 92.
37) Stepledon : Human Ecology, ibid. p. 88.
38) Stepledon : Human Ecology, ibid. p. 92.
39) 山田安彦 : 景観構成要素としての社会規範，岩手大学学芸学部研究年報，20巻，1962年9月
山田安彦 : 古代の社会倫理と地域体系の成立，岩手史学研究，44号，昭和39年9月
40) biogeochemietry はそのまま訳せば生物地球化学，あるいは生物地化学といえるが，京大生態学グループ訳 : オダム，生態学の基礎，p. 7 には生態系生態学という提唱があることを掲げている．生物化学については同書 pp. 9～23 に詳しい．制限要因については，同書 pp. 25～68 を参照。
41) Morgan, W.B. and R.P. Moss. : Geography and Ecology : the Concept of the Community and its Relationship to Environment, A.A.A.G. 55～2, 1965. pp. 339～350.
42) 訳については，京大生態学グループ訳 : オダム生態学の基礎，p. 7 による．
43) Morgan, W.B and R.P. Moss. : Geography and Ecology, ibid., pp. 343～344.
44) Morgan and Moss. : ibid., p. 348.
45) Hoffman, George W. : Transformation of Rural Settlement in Bulgaria, Geographical Review, vol. 54 No. 1, 1964. pp. 45～64.
46) Udo, R.K. : Disintegration of Nucleated Settlement in Eastern Nigeria, geographical Review vol. 55 No. 1, 1965. pp. 53～67.
47) Udo, R.K. : ibid., pp. 57·58.
48) Stone, Kirk H. : Swedish Fringe of Settlement, A.A.A.G. vol. 52 No. 4, 1962. pp. 373～393.
49) Chisholm, Michael. : Rural Settlement and Land Use—an Essay in Location, Hutchinson University Library, London, 1962. pp. 47～73, 124～151.
50) Chisholm : ibid., pp. 113～123.
51) Chisholm : ibid., pp. 154～164, 136·137.
52) Ogrissek, Rud. : Siedlungsform und Sozialstruktur agrarischer Siedlungen in der Ostoberlausitz sei dem 16 Jahrhundert, Gürlitz, 1961.
53) Johnson, H. Binder : Rational and Ecological Aspects of the Quarter Section —an Example from Minnesota, Geographicla Review, vol. 47 No. 3, 1957. pp. 330～348.
54) Schwind, Martin. : Kulturlandschaft als objektivierter Geist, vorstehend, s. 22.
55) Schwind, Martin. : a.a.O.s. 14·15.
56) 藤岡謙二郎 : 集落の歴史地理学的研究の旧顧と反省，歴史地理学会会員通信 34，昭和41年5月20日，p. 13.
57) Hövermann, Jürgen. : Über Methoden und Probleme der Siedlungsgeographie, Die Erde, 8～2, 1957. s. 120～127.
58) 三枝充悳訳 : カント自然地理学，カント全集，15巻，理想社，昭和41年1月，pp. 39～51.
59) Berry, Brian J.L. : Approaches to Geographic Analysis ; A Synthesis, A.A.A.G. vol. 53 No. 4. 1963. pp. 578～579.
60) Chapin, F. Stuart, and Shirley F. Weiss. (ed.) : Urban Growth Dynamics—In a Regional Cluster of Cities, John Wiley and Sons, Inc., 1962. p. 3.
61) Gutkind, E.A. : Revolution of Environment, London, 1946. から多くの示唆をえたので，ここに記しておく。
62) Stapledon, George. : ibid., p. 104.
63) Campbell, Robert. : New Derections in Geography, A.A.A.G. vol. 53 No. 4, 1963. pp. 582·

583.
64) Weyl, Nathaniel and Stefan T. Possony. : The Geography of Intellect, Chicago, 1963.
65) Schwind, Martin. : Kulturlandschaft als objektivierter Geist, a.a.O.
66) Schwind, Martin : a.a.O.s. 13.
67) Schmitthenner, Heinrich. : Studien zur Lehre vom geographischen Formenwandel, Münchner Geographische Hefte, 7, 1953. s. 7.
68) Schmitthenner, Heinrich, : a.a.O.s. 44.
Lautensach, Hermann. : Über die Begriffe Typus und Individuum in der geographischen Forschung, Münchner Geographische Hefte, 3. 1953. s. 27.
Lautensach, H. : Der Geographische Formenwandel, Studien zur Landschaftssystematik, Colloguium Geographicum, Bd. 3, 1952.
69) Lautensach, H. : Über die Begriffe Typus und Individuum in der geographischen Forschung, a.a.O. s. 14·15.
70) Hartshorne, R. : Parspective of the Nature of Geography, A.A.G. 1960. pp. 101～107.
71) Hartshorne, R. : The Nature of Geography, a Critical Survey of Current Thought in the Light of the Past, A.A.A.G. vol. 29 No. 3～4, 1939.
野村正七訳 : ハーツホーン 地理学方法論 ——地理学の性格——朝倉書店, 昭和35年6月, pp. 204～205.
72) 宮川善造 : 現代地理学原論, 古今書院, 昭和37年4月, p. 353 によれば, 歴史地理学は系統地理学や地域地理学に所属させず, むしろ概説的グループに預けておくのが適当であるという。
73) 八木誠政・野村健一共編 : 生態学概説, 養賢堂, 1956, p. 94.
74) Wulff, E.V. : An Introduction to Historical Plant Geography (authorized translation by Elizabeth Brissenden), the Chronica Botanica Company, 1950, pp. 6～8.
75) Clark, J.G.D. : Prehistoric Europe—the Economic Basis, Methuen, 1952. p. 7.
76) Clark, J.G.D. : ibid., pp. 9～21.